日蓮 他

山岡荘八全集 38

講談社

山岡荘八全集 38

日蓮 他

監修＝桑田忠親／村上元三／尾崎秀樹

講談社

山岡荘八全集 38

日蓮 他

著者 山岡荘八
装幀 加山又造／蟹江征治
発行者 加藤勝久
発行所 株式会社 講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一
電話 東京(〇三)九四五―一一一一(大代表)
振替 東京八―三九三〇

印刷所 凸版印刷株式会社
製本所 大製株式会社
製函所 株式会社岡山紙器所

第一刷発行 昭和五十九年九月二十六日

定価 一六八〇円

©一九八四 藤野稚子 ISBN4-06-129292-7 (0)(文芸)

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えします。

Printed in Japan

目次

図説・山田長政（カラー）　三
日蓮
越後騒動（やっこ歌舞伎）　一五一
巻末特集
日本剣客列伝〈8〉　仏生寺弥助　津本　陽　四八一
別刷　タイム・トラベルの楽しみ〈44〉　宮脇俊三

挿絵

福田隆義

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

日蓮

第一部　無明篇

愁いの供養

寛喜四（一二三二）年は四月二日に貞永元年と改元された。

その年の三月八日の午後であった。

安房国長狭郡東条郷の地頭、東条七郎左衛門秋則の館では、秋則の父の三十三回忌の法会が営まれ、いま広書院から斎の膳が引かれたところであった。

「なんとしてもめでたい供養でござった。ご尊父の三十三回忌などは、よほど仏果にめぐまれたお人でなければなし得ない」

「御領家は万々歳でござりまするなあ」

「ご子息は武勇のお方、お孫どのはご発明、これもみな領家代々のお情けぶかさを神仏がご覧ぜられてのことであろう」

清澄寺の道善法印を上座にして、頼朝がわざわざ伊勢大神宮をこの地に勧進したという東条御厨の祠官をはじめ、道善の侍者、念仏僧の鏡弁、家の子の老臣市川信友、和泉大里などが六十をはるかに超えた秋則をかこんで、いかにも曲のない雑談をはじめていた。

膳をひいたあとへ、つぎつぎに桜湯をはこびながら、今日は朝からこの館へ手伝いに来ている善日丸には、その雑談がいぶかしくてたまらなかった。

（この人たちは、どうしてこう集まるたびに芽出度がるのであろうか？）

父の三十三回忌がやれるのは、長生きの印としてたしかに芽出度いことにちがいなかった。だが、秋則の子の次郎兵衛道信は修羅の巷で戦い死んでいたし、孫の春若も決して発明とは云い得ない。

誰よりもそれをよく知っているのは秋則自身であった。

「――善日、わしがな、わざわざそなたを春若といっしょに手習いさせてやるのは、春若のよい友だちになって欲しいからなのだぞ」

この先の小湊の浦に流謫されて、そのまま漁師になりきっている貫名次郎重忠の三男と、時めく地頭の御曹司とでは、身分も暮しもちがいすぎた。

それをわざわざこの館に呼んで、孫といっしょに手習いさせる。どこかで春若の手本となり励ましとなってくれるように――そうした意味と善日丸はとっていた。

今日も上座の給仕は春若丸と善日丸の二人であった。そ

の席でも善日は秋則の顔の見れなくなるほど切ないことに出あった。
清澄寺の道善法印が、善日丸の顔をひと眼見るなり、言葉をつくしてほめ立てたのだ。
「――ほほう、これはお珍しい。このように澄んだ鳳眼、このように秀でた眉、いや、額も高雅、唇のしまりも申分ない。ご領家はご幸福でござりまするなあ」
法印は、秋則の計らいで、同じ細長を着せられていた善日と春若丸をとり違えたのである。
秋則は大きな蝙蝠（扇）をうごかしながら淋しそうに折烏帽子をかしげた。
「いかにも、よい子でござろう。それゆえ孫と区別なくいっしょに手習いさせてござる。小湊浦の漁師の次郎が子でのう」
法印は好人物らしく、この褒め違いに狼狽して、あわててわきの春若も褒めたが、春若はムッと唇をむすんで額にかん筋をうかせてしまった。
もともと今日の給仕を春若はきらっていたのだ。いかに祖先の供養とは云え、領主の跡とりが家の子の給仕はすべきではない――そんな不満をもらしていたが、秋則は許さなかった。
「――仏の供養ぞ。我執はならぬ」
善日は、春若丸には僧侶の給仕しかさせなかった。老臣たちの方へは自分が廻って、くりくりとよく動いた。
ところがそれも春若の気に入らなかったと見える。膳を引終ると納戸のわきで、
「――あとは頼むぞ。胸がわるい」
あびせるように云ってそのまま外へ出ていった。
「善日、春若はどうおしじゃ」
桜湯と菓子をはこび終ると秋則はしずかに云った。供養の酒で、頬から額が赤くなり、まっ白な髪がかなしいまでに白かった。
「はい。ご気分がわるいと、外の風に」
「そうか。わかった。ご苦労だった。そなたも下がって膳につけ」
「では――」
善日は、ていねいに頭を下げて書院を下がった。

業因

梁間は大きかったが、書院以外の作りは簡素で、一切の板戸をとり払い、中の間、下の間から厨まで、百にあまるお膳がならび、ここでも食事がはじまっていた。
その一番上に坐っている筈の春若の姿はなくて、いちばん末座の板の間に、父の次郎重忠が、野良着のまま恐縮そうにかしこまっていた。
父はちらりと善日と視線があうと、ニコリと笑って茶碗の酒を頂いた。それはお前のおかげで、わしもこうして頂

ける——そんな感謝の意味にもとれたし、自分は下働きの手伝いでも、善日は春若の手習い仲間で、上座にいる。それをよろこんでいるようにもとれた。

彼のお膳はここでも春若のと並べられていたのである。

善日丸は合掌してすばやく食事を済ますと、まだ膳にもつかぬ春若を探して外へ出た。

外は桜の真盛りだった。早いのは吹雪のように散りかけて、風が吹くと、海まで花粉が流れてゆく。

春若が好んでゆくのは館の右の岩と松と熊笹の生いしげった崖の斜面であった。

そこから海を見おろすと、左の岬がさまざまに色をかえた。早暁にはまっかな太陽を掴み取ろうとして、海にさしのべられた淡紅いろの腕に見えたし、真昼には銀の輪袈裟、暮方には紫紺の砦に見えた。

右手は奇岩の浜を天津、鴨川と伸ばしていって、あやしいまでに美しい浦を抱いている。浦のはずれは仁右衛門島であった。

「春若さまーア」

善日はその崖に立って、もうそろそろ紫がかってくる岬から足許の深潭をのぞいた。春若をよんでみたが応えはない。崖のどこかで爛鶯が鳴いている。

善日は呼ぶのをやめ、小首をかしげて歩きだした。

もし呼ぶ声が聞えても、不機嫌な時には返事をしない春若の癖をよく知っているからだった。

あれほど祖父が愛しているのに、どうして春若丸にはそれが素直にわからぬのか。

秋則はそれを前世の業だといっていたが、そういう時の秋則は、翁の面のような老いのおもてにいちばん哀しい翳りをみせた。

「——わしはな、少しは仏典もひもといたし、あちこちの聖の話も聞いてみたが、こればかりはどうにもならぬことなのだ」

秋則の悟りによれば、人に賢愚強弱の差があるのは、測り知れない深い宿縁によるのだそうな。

人間はこの宇宙の出来たばかりの頃には、あるかなきかの小さないのちの一点で、それがやがて虫となり、魚となり、鳥となり、蛇となり、獣となったのだという。

「——獣の中では猿の姿がいちばんよく人に似ている。猿からやがて人の姿になったのだが……」

秋則が炉のそばでそんな話をしだすと、春若はいつも反抗するようにわきを向いた。が、善日丸は眼を輝やかして聞き入った。

したがって猿から人の姿になっても、心の中には虫や獣や鳥や魚であった時代の心と血とがのこっている。

「——その証拠に善日も、空をとんだり、水の上を歩いたり、人間にはなし得ぬ夢を見るであろう」

春若が興なげな反抗の姿勢になってゆくので、善日丸はいつも二人分の返事をしなければならなかった。

「——はい。昨夜も空をとんで仁右衛門島までいって来ました。でもそんなことが、お経の中にあるのでしょうか」
「——あるとも。この宇宙のことは、すべて八万四千の経の中に説かれている」
「——人間が小さな小さな虫であった……それはいったいいつごろのことでしょうか、ご領主さま」
「——それか。それはのう、今から成住四十劫もの昔のことと説かれている」
「——四十劫とおっしゃると千年も万年も……」
「——いやいや、もっともっとずっと以前だ。劫というのはな、四十里立方の石の上に百年目毎に天女があま降って、やわらかい羽衣の袖でその石をそっとなでる。そのために石が磨滅して、なくなるまでを一劫という。四十劫はその四十倍ゆえ、善日にも春若にも数はよめぬ。それだけの永い間を、生きとおして来た命の、いちばんはずれにそなたたちが生きている。わかるかな。それゆえ、たとえどんな命であっても、このような生れつきなどと、自分で自分を粗末にしては相済まぬ。永い間の悪業を想うてのう、少しでも罪障の消滅をねがい、よい子を産むように心がけねば子孫に済まぬ」
そう云ったあとで、いつも秋則は、
「——善日は、大きゅうなったらな、春若の杖になってやってくりゃれ」
と、語を結んだ。

そのたびに善日は、自分の生れつきをしみじみ有難いものに思った。体は丈夫だったし誰からも愛される。げんに領主に見出されて、春若といっしょに手習いをさせられている。
「——運のいい子じゃ、ご領主さまは、ああして今から善日を育てておいて、春若さまに世をゆずってからの、大事な片腕になさる気であろう」
里人たちはそう噂しあっていると、手習い師匠の首藤経元も云っていた。
両親のもとにあっては漁りより他に糊口の道はあるまい。それが地頭の重臣になれるとしたらたしかに異例な出世であった。
しかし善日丸はそうした未来よりも、秋則の今の心のわびしさが気になった。
善日丸は十一、春若丸は二つ年上の十三だった。十三になったら元服させてわしは隠居——口癖のように云っていたのが、この春からぴたりとそれを云わなくなった。
体はぐんぐん大きくなった。家の子を叱りつける声も野太く、荒馬のあつかいや、太刀の振り方は大人を思わせる。が、春若の学業は遅々としてすすまなかった。
四書のうち論語や孟子はべつにしても、五経の中の書経、春秋など善日丸がそらんじてしまっても春若はまるで覚えていなかった。
秋則は館のうちにわざわざ手習いの間を設け、師匠の首

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

藤経元を鎌倉から探し求めて来ているというのに……

「春若さまーア」

あちこちと見て歩いて、善日は切なくなった。大切な法会の日に、いつまでも家に帰らぬ——それは祖父への反抗であり、その反抗をいちばん悲しむ秋則だった。

奇相の松にまじった金雀児があたりを明るくするほど黄いろい花をつけていた。その花株をめぐろうとして、善日丸はホッとした。

花の向うにちらりと人の影がうごいたからであった。

「春若さまか……」

不機嫌には慣れているので、善日丸はつかつかとその人影に近づいた。

露ある蓮

近づいてみてなぜか善日はうろたえた。花のかげの乾きった笹の中であわてて立上ったのは春若丸ではなくて、東条御厨の祠官が娘渚であった。

渚は今年十六、天津、浜荻、和泉へかけて、みやびた姿と明るい天成の美貌をうたわれ、漁師たちから白浜の白蓮と呼ばれている。

白蓮もよく領家の館へやって来た。

手習い師匠の首藤経元に、草紙を直して貰ったり、春若たちの講義をそばで聞いていたり。したがって善日とはとくに親しく、善日も渚が好きであった。

いつも頬から微笑を消さず、蓮の上に立ちあがった観世音を連想させる。その渚がしかし、今日はいつもの渚ではなかった。

どこがどう違っているのかわからない。

「渚どのか……」

善日が声をかけると、ひやりと冷たい風を残し、顔をそむけてのがれるように椿のかげへ消えていった。

身を投げだして泣いていたとも受取れるし、何かそれ以上のことがあったとも思われる。あわてて立ったうしろ姿に支えがなく、黒髪は濡れてみだれた感じであった。

善日丸は思わず大きく息をついた。追ったものか、追わないものかと一瞬迷い、

(尋常ではない。そうだ……)

あわてて後を追いかけた。

椿の向うは岩つつじとまんさくの灌木だった。それを泳ぐようにわけていって、

「あ——」

善日丸はまたハッと立ちどまった。すぐ足元にあおむけに寝ころんで眼を閉じている、手習い師匠の首藤経元を、あぶなく踏もうとしたのである。

「お師匠さま、こんなところに……」

投げ出した頭のわきに太刀と草鞋をいっしょにおいて、経元は答えもしなければ眼も開かなかった。見るとこれも

閉じた眼のくぼに空をうつした露をたたえているのである。

（お師匠さまも泣いている……）

善日の頭はひどく混乱した。

首藤経元は以前北面の武士であったそうな。それが流れ流れて鎌倉へやって来て志を得ずにいるのを、東条秋則に拾われて来たのだといった。年はまだ二十五。

「お師匠さま……」

もう一度声をかけてかがみこむと、急に経元は歯を喰いしばって全身をふるわしだした。

「善日……」

「はい」

「おぬしとも、いよいよ今日でお別れぞ」

「え？　それは……どうしてでござりまするか」

「おれはな、はじめから春若どのには望みをかけていなかった。縁あって安房の地へ来て、この崖から毎日大きな朝日ののぼるのを見ているうちに、ここが日本の東、日本の真中ぞと思うようになったのじゃ」

云いざま経元はくるりと起き直って涙をふいた。凄まじく光る褐色の眼が、ぴたりと善日に据えられて、虹を吐きそうな鋭さだった。

「頼朝公は伊勢大廟をこの地に移した。伊勢では大廟を守護しきれぬと思うてのことであろう。が、その所縁でおぬしのような子が生れた……よし、この地でこの子を育ててやろうと、それがおれの望みであったが、それも今ははかなくなった。……よいか。おれがいなくなっても怠るまいぞ」

善日は瞬きもしなかったし、頷きもしなかった。経元がどんなに自分を愛していてくれたかはよく知っている。が、どうしてこの地を去らなければならないのかがわからなかった。

経元はふと視線を和げ、

「おぬしに形見をのこしていこうかのう」

善日の手をとって、そのまま空を見上げていった。

善日はいよいよ心がふるえていった。いつもきちんと姿勢を正し声を張っている経元の、こんなに淋しそうな姿を見たのははじめてだった。

「善日にはまだわかるまい。が、人間はいつも一本、縄る綱がいるものじゃ。その綱が太ければ太いほど、正しければ正しいほど人には力が出てくるものじゃ」

「……」

「あるものは仏にすがる。あるものは法にすがり、ある者は僧にすがる。いや、ある者は寺院にすがり、ある者は権力に、又ある者は主君にすがる……が、その縄っていた綱が、実はむなしいまぼろしだったと知ったとき……その時ほど悲しいことはない。……いいかな善日、首藤経元はいまその綱の空しさを知ったのだ。わしの眼の前は日月あれど無明の闇じゃ」

ふっと声が途だえたと思うと、経元の双眼からはおかしいほどに涙がおちてゆくのであった。

地上の憤怒

「おぬしは知るまい。おぬしの産れる前年だった。いやそうではない。おぬしは二月の十六日にこの世へ誕生した。それゆえ、すでにその前年の七月には、母の胎内で一点の生命となって生きていた……よいか。その七月に、おそれおおくも、先の帝、一の院後鳥羽上皇は隠岐に流され、中院土御門上皇は土佐に、新院順徳上皇は佐渡に流され給うたのだ……」

「お師匠さま」

あわてて善日はさえぎった。

「先のみかどと仰しゃると、それは主上でござりましょうが」

「そうだ」

「主上は、この世でいちばんお偉い尊いお方……誰に……大御神に流されたのでござりまするか？」

経元はじろりと善日を見たままで、

「おれの父者は、中院土御門上皇の御家来だった。父者は見えがくれに上皇のみあとを慕っていったと知って、この経元は、逆に鎌倉を志した。三上皇を流した逆臣、北条義時の寝首をかいて、この世に天道あるを知らしめようと、それがおれの生き甲斐だった……」

善日丸の眼は不審とおどろきに、瞬きを忘れた。北条義時と云えば、先の執権、執権は将軍の家来であり、将軍は主上の家来。それが、なぜ主上を……という疑問と、自分たちの手習い師匠が刺客であったというおどろきで、息がつまりそうであった。

「ところがそれは次々に突き崩された。元仁元（一二二四）年六月十三日、おぬしが三つの時に、義時めは、おれの刃も待たず、数百の僧侶の読経に供養されながら、あの世へいんでしもうたのだ……まだ鎌倉へついたばかりのおれは茫然としてしもうた……いや、それでは済まぬと、気を取直したのは、中院さまが土佐から阿波へ移され給うて、まだ生きておわすことであった。日本に神仏のある限り、この逆道を許しておくはずはない。晴れて都へ還御の日まで、切腹は相成らぬ……と。ところがなあ善日、その土御門上皇は去年の十月十一日御宝算三十七歳で崩御なされていたことを……今日、渚の父御に聞かされたのだ」

善日は大きく眼をみひらいたまま一言も発し得なかった。

「父者もその前に死んでいる。義時も上皇もいまはない……わしの縋って来た綱は、ぷつりと断たれて消えてしもうた。この世に神仏などあるものかッ。伽藍はそのまま伽藍洞じゃ。もし仏があるとしたらおれはその仏に糞尿をあびせてやる。ご不幸な中院さまをまもろうともせず、逆賊

の義時めに蓮華をふらすのが仏なら、仏とは腐り果てた魑魅の類じゃ」
また感情が激して来たのだろう、経元はきりりッと歯をかみ鳴らし、全身をふるわせて嗚咽しだした。
気がつくと、いつかあたりへは透明な紫の暮色がしのびより、眼の下の碧海にかすかに波が立ちだしている……

骨肉の相剋

善日丸は、ぼんやりと館の裏門をくぐっていった。
彼の小さな魂は、掌につかまれた小鳥のように、まだブルブルと戦いている。彼の力では、経元の決心をひるがえすことは出来なかった。
経元はこれからすぐ阿波へ発って、上皇崩御の御あとを慕うというのであった。
はげしい感情の波が去ると、
「——おれは、おれのすることが正しいとばかりは思うて居らぬ。早まっているかも知れぬ。もし早まっているところがあったら、善日、おぬしはその轍を踏まぬよう。ではこのまま別れようぞ。おれに会ったと誰にもいうな」
そのあとで、もう一度しみじみと善日丸を抱きしめた。
神も仏も信じられない。神仏を信じられなくなった者に人を教える資格はない——そう云いながら、善日丸を抱きしめた経元は、愛情をこめて何かに祈っている感じであった。
「——ではくれぐれも体をいとうてな」
「——は、……はい。お師匠さまも」
「——おお、おれとて御陵のそばで腹切るまでは大切な体じゃ。では縁があったら又あの世で会おうぞ」
そして善日を離すと、自分の言葉に自分で気づいて、
「——ハハハ……」
と佗びしく笑った。
「あの世ではもう会えぬ。おれは仏に唾を吐きかけて行くのだった。さらば」
その声と後姿が、まだ善日をしっかりと捕えて離さない。
ほんとうにこの世に神仏はないのであろうか。
あったら、なぜお師匠さまをあんなに怒らせるようなことをさせるのだろう。
家来の家来が、いちばん偉い権力者を流すことが出来たというのも合点がゆかなかったし、そんな悪いことをした者を誰もこらさず、死ぬまで執権にしておいて、仏罰でも下すことか、鎌倉中の僧侶が集まって供養したという。
鎌倉には事の是非をわきまえた一人の聖もいなかったのだろうか。
(仏さまがあれば証はある筈なのに……)
まだ十一の善日丸にとっては、これは当分頭を離れず解きもならぬ難問だった。
この上、阿波へ着いて切腹するはげしく悲しい経元のま

ぼろしがつきまとう。
「善日！」
厩のわきへかかったときだった。風よけの槙のかげから、春若丸がきびしい声で彼の行手に立ちふさがった。
「あ、春若さま、ずいぶん探しました」
「黙れ。いまごろまでおれを探しているものか」
そう云われると善日丸は言葉を返せなかった。はじめは探したが、途中からは忘れていた。
「黙ったな。やい、会ったろう？」
「誰に？」
「しらばくれるな。かくす気ならば、おれにも覚悟はあるのだぞ」
春若は丁と太刀の柄をたたいて、
「おれはいつまでも子供ではない。おぬしの告口などにびくびくするものか。腕もおいぼれには勝っているのだぞ」
「春若さま！　そのおいぼれとは……大殿さまのことではございませぬか」
「そうだ。六十すぎてまだおれに世も渡さぬ。業の深いおいぼれだ」
「もったいないことを仰しゃる。あなたさまには大殿の、あのやさしいお心がわかりませぬか」
善日が色をなして詰めよると、首だけ大きい春若は言葉に似合わず一歩さがった。
「そらすなそらすな。そんなことで話をそらそうとしても、その手は喰わぬぞ。察するところおぬしも渚が好きなのだな」
渚――と云われて、善日はホッとした。誰にも云うなと云った経元のことを訊かれたのかと思ったのだ。
すでにあたりは仄暗く、館の中では、昼の客は大半引きあげ、近郷の念仏信者があつまって鉦に合せて唱名していた。
勝手許ではまだ大ぜいの男女が立働いている。
「渚どの……ならば会いました」
「そうだろう。渚は何んと云った？」
「べつに何も」
「云わぬ筈はない。おぬしがどこまでもかくすなら、覚悟があると云っているのがわからぬのか」
「これはまた難題を……覚悟とは何をなさろうというのです」
春若は躍りあがるようにして頤をしゃくった。
「おお、たたっ斬るというているのだ。わかったか」
善日は悲しくなった。これでは祖父の秋則が、隠居出来ないのも無理はない。何も彼もひとり合点で、野獣のように押しまくる。
秋則のいうように、人間の中へ進化の途中のさまざまな動物の血が残っているとするならば、これはさしずめ、猪ではあるまいか。
「春若さま」

「なんだ」
「もう一度はっきりと申上げます。渚どのとは会いました。会いましたがべつに言葉は交しませぬ。今日の渚どのはいつもと違って、善日が声をかけると、そのまま逃げるように去んでしまわれました」
「嘘ではないな。祖父に何か云いつけてくれとは頼まなんだな」
「大殿さまに……すると春若さまは、渚どのをいじめなされた……」
「ううん」
と春若はいくぶん機嫌の直った顔で首を振った。
「いじめるものか。おれは渚が好きなのだ。ところが渚めは、手習い師匠を好きだという。そこでな……ふっふっふ。可愛がって撫でてやったのだ」
善日はここでも何か冷やっと不安を感じたが、何といっていいのかわからなかった。
「そうか。何も云わなかったか。ではそれでよい。何も彼もうまくいくのだ。ふふふ……。おいぼれに云うんじゃないぞ。手習い師匠にも黙っていよ。おれはもう、おぬしのような子供ではない」
ぐっとそり身になったとき、
「春若、春若はおらぬか」
秋則に呼ばれて、舌打しながら駆けていった。

生きつぐ心

「善日、よい法要だったな」
「はい」
「大したもの入りだったろう。斎の客から念仏の衆までいれると三百人を超えていた。そうそう、手伝いの人の中で、そなたのことが評判でな。わしは鼻が高かったぞ」
月を踏んでのその夜の帰途であった。勝手の手伝いを終ったあとで、また一杯茶碗酒が出たらしい。父の次郎重忠は微醺の頬を風にさらして、いつになく多弁であった。
根からの漁師ではない。両親が大切に仏壇の下へ納めてある系譜によれば、大織冠藤原鎌足公十二代の孫、少納言共資の後だとあった。共資は、遠江のうち、敷智、引佐の二郡を授けられて移り、その子は井伊氏を称して備中太夫共保となっている。その共保の曾孫、赤佐太郎盛直に三人の子があり、三男四郎直政が山名の郡司となって貫名に館をかまえたので、それから貫名の姓を名乗った。
父はその直政の曾孫にあたっている。
将軍の実朝のはじめに、三浦盛時、富田基度等平氏の残党が乱をなし、父もそれに内通した疑いで安房へ流されたのであった。
父はその事にふれるのを何よりきらった。郷に入っては郷にしたがえ——そういって、自分で漁師になりきろうと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com